
白い塔

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い塔

【Nコード】

N3089P

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

門の紋章の片割れの話。

ルックが逝った。

全てを憎み、紋章を憎んだあの子は、世界を壊したかったのだろうか。

私の目は、あの子が空を流れ、あの子を慕った少女と共に去る姿を見ることは叶わない。

- - - - -

塔の窓から空を見るレックナートは一段と高く顎を持ち上げた。白いフードが肩に流れ落ちて黒い髪がさらさらと風に舞う。

窓から身乗り出し夜の空へと身乗り出すその姿は、手元に置いた可愛い弟子を送る師匠としてか、

二人の幼い子供を慈しみ、育てた母性がそうさせるのか。

風がふわりと塔を包み込んだ。

身乗り出したレックナートの黒い髪が巻き上がり、夜の闇と同化する。

「最後に会いに来てくれたの？」

見えない流れ星に声を掛けながら手を伸ばした瞬間、背後から身乗り出すレックナートの腰を抱く影。

「死にたいのか？ 執行者は。」

冷たい声に返事をするかの様にレックナートの手は握りこぶしを作った。

「ユーバー……。」

「死にたいのなら、このまま突き落としてやろう。」

白い背中の中で残忍な笑みを浮かべる八房の紋章。破壊と混乱を何より好む存在。

「貴方、あの子に手を貸したの……？」

「知っている事を何故聞く。」

虚空を握る手を掴み楽しそうにユーバーは言葉を続ける。

「憎悪の対象が欲しいのか、レックナート。」

「今更貴方を憎んでも、あの子達は帰ってこない。」

遠い空の星の様な小さな声が悲しみに瞬く。

「紋章も行方知れずか。お前が探す紋章と同じだな。」

- - - - -

昔、一人の女性が門を開いた。

数多の魔族がその門から飛び出し、もう一人の女性が慌てて門を閉ざそうとした。

その瞬間、魔族の声が裏の門の力を行使しようとした女性を捕らえた。

「女、門を閉ざすか？」

「当然だわ！貴方達は自分達の世界で生きるべきでしょう！」

「我は青い世界から人間の世界へ出でる。お前の守る門を破壊する事などたやすい。」

魔族は嘘をつく。だが、今の言葉は嘘ではない。

レックナートは門をくぐり、魔族の青い世界へ入り込んだ。

「内側から門を閉めれば、例えば表の紋章を使っても門は開く事は無いわ。」

愉しそうに笑いながら魔物は言った。

「いい度胸をしている。お前に免じて俺で最後にしてやろう。」

人間界に出るつもりだ。レックナートは門を閉じようとした。

魔物はそれより早くレックナートの顔を両手で挟み、端正な顔で呟いた。

「黒い髪に青い瞳か。この世界の象徴の様な色だな。」

青い目が大きく見開かれ、言葉を口にしようとするレックナートの口を大きな手が塞いだ。

レックナートは両手で相手を押しやろうとするが、魔族はぴくりとも動かない。

「他人に見せるのは勿体無い、その青は。」

もう一方の手が視界に迫る。その手を払おうと白い手が勢い良く持ち上げられた。

口を塞いでいた手が空中で手首を掴み、魔族は静かに言った。

「だから俺が貰っておこう、レックナート。」

手が視界を覆うと同時に、目も光を失った。

顔の上半分を手で覆われ、視力を奪われたレックナートはそれでも言い募った。

「私はいつか必ず門を閉める。」

「内でか？外でか？」

「わかつているのでしょうか？答える必要はないわ。」

門の紋章は二つ揃っていてこそ、真の力を発揮する。

今は両方揃っていても、この魔族に対抗できる力が不足している。

並び立つ程に力をつけたら、その時は門の内側から閉ざす。

紋章ごと魔族に喰らわれるが、もう門は開く事は無い。

人間の世界に出た魔族も減ることはあっても増える事はなくなる。

「その時は俺もつきあってやろう。」

言いながら魔族は覆っていた手をレックナートの顔から離れた。

黒髪が覆う顔。そして瞼は閉じられていた。

魔族は白いローブが覆う肩を抱き、人間の世界へと誘う。

門をくぐると同時にレックナートは門を閉じた。

「また会おう。」

「魔族となんかもう会わない。」

「ユーバーだ。」

「え？」

「俺はユーバーだ、レックナート。」

そう言い残し、ユーバーはいずこへと去っていった。

- - - - -

「此処で身体を癒す。」

癒えた後、白い塔から離れるユーバーは窓辺からレックナートを引き離れた。

「貴方も無傷という訳にはいかなかった。」

返事をするレックナートはユーバーに肩を抱かれ、背中が窓を向いた。それでも白い顔は夜空を向いている。

「執行者は秩序に偏っている。これで丁度いいだろう。」

夜空の様な黒い頭を大きな手が抱え込み、強引に顔を窓から正面へと移動させる。

泣く事が出来ないレックナートは眉をひそめて何も言わない。

二人は大きなソファアーへと静かに歩き出した。

「表は今だ行方不明か。」

「時がまだ満ちてはいないのでしょう。」

「見つけたらどうする？」

「知っている事を何故聞くの？」

ユーバーは立ち止まり黒い頭を自分の胸に押し付けた。

さらさらと髪が流れ、白い肩が震えた。

「さっさと俺を閉じ込めろ。」

「難しい事を簡単に言わないで、ユーバー。」

悲しみに震える声が非難の言葉を呟いた。

流れた星は風と去り、今は無数の小さな星が夜空に煌めく。
その星明りはぼろぼろと白い塔に零れ落ちた。

（後書き）

パソコン整理したら出てきたので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3089p/>

白い塔

2010年12月5日06時31分発行